

読本作家の構成能力の問題

(一)

——八犬伝をよすがとして馬琴の場合——

目加田さくを

「初心読ニ小説書」モノ、為ニ其熟字虚字助字等ヲ画引ヲ以テ輯レ之其訳ヲ附ス」という天明甲辰の画引小説字彙秋水園主人著を抜くと、その援引書目に百六十書を掲げているが、その中には今日逸書となつてゐる物もある程、頗る珍しい本が読まれている事に驚くのである。援引書冊の多い事、並に、此の様な小説字彙が出現の必要に迫られていたという事実だけでも、当時、十八世紀（甲辰は一七八四年）の江戸に、いかに支那小説が流行していたか、通曉ぶりを自記する読本作家達がいかに心酔し読破していたか想像に難くないのである。ところで彼等は、読本作家としての立場から、支那小説の如何なる面に強く心惹かれたのであろうか。小説字彙凡例で「又水滸伝ノ如キハ其訳スル所ノ書已ニ世ニ行フ故ニ委シク記セズ云々」といつており、その援引書冊に目を通して行くと、その臂頭に、後水滸伝、金瓶梅、三国志演義、五代史演義、西遊記をあげ、唐代小説は少く、明清の小説が目立つなかに、今古奇觀、拍案驚奇、醒世恆言、警世通言、小説選言が注意をひくのである。即ち、唐代伝奇に比すれば著しく構成のしつかりした小説、乃至は著しく構成的な、且つ比較的長い説話が見出される事

である。又、代表的読本作家として自他共に許す馬琴が、その著「近世物之本江戸作者部類卷第二読本作者」の項に、読本の始祖として、雨月物語の上田秋成をあげずに、本朝水滸伝の吸露庵綾足をあげている事、その読本作家として掲げた綾足、（風来山人）、（平沢月城）、（蜚蜚子）、（芝全交）、山東庵京伝、（桑楊庵光）、（雲府館天歩）、曲亭主人、の作品をみると、本朝水滸伝を始として、忠臣水滸伝、桜娘全伝曙草紙、昔語稻妻表紙、本朝粹善提、椿説弓張月、頼豪阿闍梨怪風伝、三七全伝南柯夢、占夢南柯後記、南総里見八犬伝、近世説美少年録の如き代表的作品は凡て、日本小説史上稀にみる構成のしつかりした作品群である事、又、馬琴が入門を申し出た八九人に対し、「一人も是を許さず且其輩に論すやう云々且戯墨は師に従ふて学ぶべき者にあらず各其才に儘するのみ吾は唐山（からくにん）人の稗史小説を多く見て其文其巧致なるを択みて他に倣（か）へり」と言つてゐるのである。それらを筆者は、「素材的興味に惹かれた翻譯翻案文芸、乃至小説は、古く唐物語今昔物語集以来、奇異雑談集、怪談全書、智恵鑑、雨月物語等数多く出現したがかれらの行き方に飽き足らぬ貪婪な読本作家の眼力は日本小説——（物語草子）——には欠除した性格を支那小説に

始めて発見した。即ちこの堂々たる大建築を想わせる支那長篇小説の構築性に、驚異と尊敬とを感じ、当時の戯曲（浄瑠璃、歌舞伎）によつて、漸く覺されて来ていた小説作家の構成能力が急激に擡頭する契機を擲んだ、具体的には、「我々が書きたいものはこれだ、この様な大がかりながつしりした作品を書こう」という意慾が読本作家に湧いて来た事を意味する」、と見るのである。

此の小論では、読本作家の代表たる馬琴の八犬伝を手がかりとして、当時の日本の代表的小説家——読本作家をその意味で最も構成能力をもてる者とみて——が、日本小説の伝統と共にこれと異質の支那小説を教養として出発した筈であるが、それはどのような成果をあげたか。更に、どこまで支那小説の構築性が血肉となりえたかについて考察してみようとするものである。此の問題は日本小説史の立場から、日本小説における根強い私小説性乃至心境小説性の究明の問題に将来關聯させて行く計画である。

曲亭馬琴は、文化乙丑（二年）に、八犬伝執筆（文化十一年）に先立つ事十年、新編水滸曲伝を編訳した。その弁に「予嘗水滸伝を読むに食を忘れて厭ことなく燭を秉りて倦むときなしこの書や変化の妙宛転の奇おのづからしかるものにして作者一生の精神半世の英氣を竭し文章一字をなして他書とおなじからずこゝをもて白頭の宿儒なほこれを病めり況予が管見をもて此書を訳んはいとろめたし」と言っている。傍点（筆者）の部分は、前後の文章からして、「文章云々」という表現——描写、叙述——の妙と相まつて、水滸伝がもつ奇想天外、規模雄大な構成を讃嘆しているものと解されるのである。作家として自負する所の多かつた傲岸な彼が「況予が管見をもて云々」と謙遜し、寝食を忘れて読

み耽つた所以は、日本小説の伝統にない「変化の妙宛転の奇」とめる構成に強く吸引されたからである。この水滸の訳にあたり、彼は金聖歎本（七十回本）を採らず、百回本を採用したが、その理由として、「聖歎以為。始三石喝散妖。而終三石喝収妖。是所三以七十回為正本也。然而此書終二十七回。則閱者尚似有遺憾。是以取全百回云々」といつている。「金氏批註及兩三本」をもつて百回本を彼は校定して編訳したというが、それは書誌学的な或は成立史的な立場から顧慮して、百回本を底本たるべしとするのではない。洪信が誤つて石喝を開き百八妖魔を四散させたが、天下を騒がせた後、梁山泊の一堂に百八人が会する。これを一構成と金聖歎はみて正本と考えたが、自分は、それでは飽き足りない。その後百八人が梁山泊を下り、それぞれ命数つきる迄を構想した一廻り大きな構成をもつ水滸伝の方が、読者の欲求を満足させるものであるという理由からである。その構成上の当否は暫く措き、馬琴はそれと全く同じ意図から房総里見八犬伝を構成しているのである。即ち伏姫の腹中から八方へ飛散した八玉の八犬士が紆余曲折をへて里見の家臣となり、八城の主に封ぜられ、八姫を配せられるのを以て終りとせず、隱居して地仙となる迄を構想しようとする。此の著しく長篇的な構成を志向する馬琴の構成力の性格は、彼が文化初年に水滸伝編訳に際して、七十回本をおいて百回本を採用した時期に確立していたとみるべきである。如上構成的な関心と嗜好をもてる馬琴に嗣いで、武編以下を訳編した高井蘭山は、水滸伝編訳に際して、その巻末に水滸伝批判を記して行つた。その批判は、蘭山の後記によれば一蘭山の意見のみではなく、当時の水滸伝愛読者（馬琴をはじめ読本作家をふ

くむ)等の論をふくむのであるが、それを今日みると、構成に関するものが著しく多く、その人物描写、性格に関する批判も、構成とは無縁でないものである。その水滸伝批判を先ず手がかりとして、馬琴の構成力の様態を考えてゆこうと思う。

「趣向」の同じきものを難ずる場合(Ⅰ)

三編卷廿八末に、「或人論して云。此書武編目に宋江閻婆惜との事に、閻老婆唐牛児の諍論あり。比編潘金蓮西門慶との事に。王婆鄆哥の諍論あり。事異なれども作者別に工夫もなかりしにや。」四編卷卅九末に「前の編武松が景陽岡にて酔後虎を殺す段に、獵戸どもが驚て云詞。……又信ぜずして其場に至て果して死虎を見る。彼は里正の宅にて管待。是は曹太公の館へ導く。事は別にして趣向大ひに似たるかな。」

四編卷四十末に「又前の編。武大郎武松の段に武大郎が妻潘金蓮武松に恋慕し忽ち武松に羞辱められ。却つて夫の留主に武松我に戲弄をなせりと武大郎へ訴へ。比卷には楊雄が妻潘巧雲。夫の留主に石秀我に戲弄をなせりと楊雄に告。奸夫を需る姪婦。此の詞を以て夫を誑く定例のごとし。外には工夫も思慮もなきものにや。」

八編卷七十四末に「又た田処が乱を聞出し。宋江に告知らすと。此後李逵が口論より。方臘が乱を聞出し。宋江に告知らすと。同じ趣向なり。」

以上、四組を同趣向として非難している。これは、百回本の長篇にしても、確に、部分的構成における相似の不手際であつて、妥当な非難であるが、では馬琴は、この様な部分的構成の不手際

を戒心して、八丈伝においてどのような方法を用意したであろうか。それは後述するとして、次に、

布置結構の矛盾(Ⅱ)

三編卷廿八末に「比時張青が談話に。我々夫婦の當み旅人を欺き殺し。衣類を剥取り殺せし人肉を牛肉と偽肉包を制し買物とす。店に入来れども殺さざるもの三つあり。僧侶を殺さず……と而して武松行者の模様に姿を変。宝珠寺へ落行に臨て孫二娘が詞に。二年以前一人の頭陀店に入来たるゆゑ。蒙汗藥の酒を用ひて殺し……衣類と携へ来りし品は取置し。其直櫛度牒珠数戒刀の類を武松に与へ。旅粧ひをなすとありては。僧を殺さずとの言は。出傍題の虚言と聞ゆ。」同所に「又事をあぐれば。張都監が八月十五夜。月の宴をなし。武松を捉へん計に。堯を正中に置暗きゆえ武松跌き倒れたるを。大勢にて取押へ綁るとあれ共。比の月は曉までは傾かず。物に躓く程の闇夜にあらず……」

同所に、「又睡て生捉らるゝ共。幾ばくの人をも踢殺すばかり。足のはたらく剛力にて。凡々の四人に牽れ。張青が宅に至るをもめめと云甲斐なし。此張青が家には一度来て逗留し。人を宰所迄も見置きたるに。何国へ引来られたるか弁ざる跡も不審……」を「或人云」として一応掲げ、「愚弁して云水滸伝の書は支那俗間の稗史なれば。理論を容に足す。奇談に文華を加へ、画に虚事するは。和漢一つなり。譬は今日の児女の弄ぶ双草紙。俗間に読絵入のよみ本などを見て。其事の虚実を議論し。旨趣を弁鑿する者はいまだあらず……狂言綺語は穿に豎べからず」と弁じたわけであるが、これは似作と実録の相違を啓蒙するのみであつて、

この場合当然ないわけである。仮作——狂言綺語——が優れた創作であるために、当然要求される「構成の自然さ」を希求して、一応水滸の欠陥を指摘しつつも、未だ三編廿八卷末では、不容易に、「狂言綺語は穿におよぶべからず」と弁護するところに、馬琴等読本作家並に当時の翻譯者達が構成を仮作——小説——に希求する氣持の裏面を露呈している感がある。即ち、馬琴等は、小説の構成に際して、現実の人生にありうべき生の構造を意図するわけであるが、仮作——狂言綺語——という立場を堅持する故に、超現実的伝奇的生の構造になる場合が多いと共に、その場合に生ずる宿命的不自然不合理性と、全く別種の作家の「粗漏杜撰」によるそれとを混同していたとみるべきものである。それが後篇に到ると明瞭に「粗漏杜撰」と評するに到っているのである。

四編卷卅一末に、「且秦明が五百の軍勢戦死もあり過半水に溺たれ共。百六七十人の官軍山陣に生捉となし此者共にも酒肉を恵むと有りて翌朝秦明青州へ馳販る時は従ふ人もなく唯一人販りたるは。此官軍は山陣に捨置たるにや不審と云々」

四編卷卅七末に、戴宗を糺問する蔡九知府が詞に父太師が家の門番を問ふて……蔡太師は宋の宰相なれば日本に比せば何れ何万石の分限なるべし。……然るに水滸は支那人の作に有りながらかゝる不相当のことたるや。宰相の把門ならば大勢代る代る勤むべきことなり。」

四編卷四九末に「又朱貴朱富李逵を救ひ……沂水県より梁山泊へ三日のほどに行着とみゆ。然るに戴宗公孫勝を尋るに梁山泊を立て三日沂水県を過ることありては……神行の法にて一日八百里を行戴宗も三日とは、神行の法あることを此所に至て作者忘却しけ

るにや。」

五編卷四十五羅真人が道家であり乍ら「秋氏にて汝幸ひに火坑を脱れ出等の仏語をなす……且かゝる清修をもなす人にして誕辰慶賀の進物十萬貫を天より賜る富貴なりとて……奪ひたる人数の内なるも笑ふべき事……」

五編卷五十「晁蓋曾頭市の軍。案内も知らぬ敵地に在りながら、両僧の言に詐され。おめおめと計に陥るとは。小児の戯れに等し。さばかりの虚氣者が、一日たりとも山陣の主として、余多の豪傑を指揮せらるべきや。作者の看官を愚にすること過たりと云ふべし。」

五編卷五十二「此卷李固主人を殺さんとて。節級に銀を送つて頼むに。五百両の銀を幸ひ持合せたればとて。出して渡すとは。怪しむべし。五百両の銀懷中には猶さら包て提ぐるとも目方といひ嵩高にて。こゝにいふごとく取扱かふこと成るべからず。」

六編卷五十七末に「……然して其人数を算れば宋江の方……姓名の数齟齬あるは作者の杜撰なり」

八編卷七十四末に「論者云く水滸伝一部に夢いかに多し。又唐斌が天文。若し宋江關を伺はしむる使を出さずば。急に達しがたく。手術皆差ふべし。危いかな」

九編卷八十三「論者いはく。費保ら初めに敵船を奪ふ時相図の石炮を打つとは漁師の盜賊何の爲めに石炮を貯へ置きしや。肯がたき文段なり。」

九編卷八十九「論者いはく此一段心得がたき事有り。宋江は至孝の人にて……大勢を催し行途中にて石勇より宋江が書状を得て。父太公死せりと聞大勢を捨て連夜に己一人古郷に馳回りしとあり

……是より宋江幾ばくの危難を経よし……宋江招宴の上先鋒使の職を蒙るは其身分以前の宋江とは雲泥の差なり。宋清は家に在しめ老父の介抱せしむべきものなり……縦ひ方臘を征伐に辺塞に在とも。大公の死を家来より知らせ遣はさざるはいかん……宋江錦を着て古郷に帰るに及んで老父の死をしらず……又云く此巻の始め百八人の内。当時存世の三十六人名前あり。背面歟楊志も……名前を加へ三十七人と有て煩ひ丹徒県に留るよし記すべし。作者の無念に似たり。殊に情合の行届ぬ事有ては。作り物語りの証拠あまり早く見ゆ……」

以上の如く、後篇に到るにつれて、水滸画伝訳編者所記の批評は辛辣になり、一層数多くなつて、水滸伝構成の虚を衝くのであるがそれは凡て部分的構成のミスを探り出すに止つてゐる。しかも、「作り物語」の意識——それは狂言綺語は兒女の戯であり、我はその執筆を人生の目的とするに非ず書冊を購はんが為云々といわゆるをえない馬琴の意識に連るものであるが——が根強く、仮作は創作であるが為に、作者は「情合」を行届かせて「粗漏」なき構成を組みたつべきであると迄は考へなかつた様である。以上彼等水滸編訳者達——（馬琴、蘭山、とその交友）は水滸編訳に際し、雄篇水滸においてすら部分的構成の類似、粗漏、杜撰のある事を指摘しえて己が才氣を恃んだわけであるか、実作に際して、馬琴は水滸をどの位教養として消化し自己の構成力を育て得ていたであらうか。

文化三——七年刊行の椿説弓張月においては、鎮西八郎為朝を主人公とし、その波瀾万丈の生涯を展開させるのに、京都、九州、伊豆大島より琉球島にまで地域を拡げたのである。大団円

は、その子舜天丸が琉球島の王位を継いで舜天王となり、為朝は仙界に入るといふ大構成であるが、此の場合、当時世間の関心を惹きつゝあつた琉球、もとより小説の背景に未だ嘗て採用されなかつた新天地を、その方処的世界にもつてくるという事は馬琴にとつて非常な構成上の野心的意図であつたと思われるのである。ところがこれと正反對の、江戸人に最も近い、即ち、親近な関係にある豊島郡、下総の市川、行徳をへて上総、安房を、八犬伝の方処的世界として採用した事は、実は同じく馬琴の非常な野心的意図に依るものなのである。弓張月は未見の遙なる世界琉球の故に、八犬伝は、日常歩きなれ耳目に親しい天地、それは歌舞伎、人形浄瑠璃の世界に登場して、より親近感を増してゆく江戸近傍であるが故に方処的構成においても亦、「看官」の拍手を期待する所が多かつたとみるべきである。この様な立場から、この小論では八犬伝の構成を主として方処的関聯においてみてゆこうと思うのである。

馬琴は、水滸画伝において、水滸伝が全く架空の小説ではなく、宋史、宣和遺事に宋江以下三十六人の実在の人物がある事をのべ、「しかれば此の書寓言といへども大に拠あり」「未生の人を談ずるにあらず」といふ風に取材の原典を示したのであるが、八犬伝の著作に際しても亦、房総志料、里見軍記、房総治乱記、北条分限帳、甲斐名勝志等々を参考にして「個小説を作設、因を推し、果を説て婦幼のねふりを覚すものなり」といふ、「歴史に依拠する仮作」の立場を明言したのである。さて、一輯の末尾に、「作者云……この段八犬士の起るべき所以ををささ演記して肇集五巻の尾と定め首巻に十回の題目を載するといへども思ふにまして物語はながながしくなりしかば……」「大約こゝに演る所

はこの小説の発端のみ。これより下は八犬士のやゝ世に出べき事に及びりこの後又年をへて八子八方に出生し聚散時あり約束ありて竟の里見の家臣となる八人の列伝は前後あり長短あるべしまだ其処までは政果さず年をかさね巻をかさねて全本となさん事さきに予が著したる弓張月の如くなるべし云々」

右によれば、執筆当時（文化二年）は、彼はあらかじめ

発端（序）：八犬士の起るべき所以

上昇動作、八犬士のやゝ世に出べき事、

（八犬士列伝）八犬士八方に出生

中心動作（頂点）聚散—離合

大団円 里見の家臣となる。

全体の構成を極く大まかに、かく考えていたのである。その発端が予定より長すぎた事を述懐しているが、それは、いかに此の染筆に当つて作家的情熱に馳られて氣負うていたかを想わせるのである。又、「弓張月の如く」全本となさん事云々は、即ち水滸伝に金聖歎本をとらず、百回本の、英雄それぞれの末期を見届ける雄大な首尾一貫せる構想を、採つた氣構であり、弓張月の場合には英雄は為朝一人であつたが、今度は、八犬士という八英雄の出生以前より、八方に出生し離合聚散、終焉までを包含する一大雄篇を、自分の小説、里見八犬伝において試みようという意気込みなのである。先づ、史伝に基いて主人公たる八犬士が次々と登場するが、その年齢、出生地の一覧表を左に掲げてみよう。

犬塚	信乃	寛正元	七月生	生国武蔵大塚
犬川	莊介	長禄三	生	伊豆
犬山	道節	長禄三、九月生		武蔵煉馬

犬飼	見八	長禄三、十月生	安房洲崎
犬田	小文吾	長禄三、十一月生	下総行徳
犬江	親兵衛	文明七、4才	下総市川
犬坂	毛野	寛正六、十二月生	相模犬坂
犬村	大角	（長禄三、頃）	下野赤岩

右表をみると、年齢的にも故意にひらきをつけたものゝ様である。此処で問題になるのは、八人の出生地が六ヶ国にわたつてゐる事である。そこから各人が出発し、各々行動を開始する。即ち、八犬伝の方处的構成圏は関東地方一帯をその世界として予想するわけである。

さて、南総里見八犬伝と名称をつけた馬琴は、その肇輯第一卷

第一回の冒頭において

（A）京都の將軍鎌倉の副將武威衰へて偏執し世は戦国となりし比、難

を東海の浜に避て土地を開き基業を興し子孫十世に及ぶまで房総

の国主たる里見治部大夫義実朝臣の事蹟を考るに清和の皇別……

季基ぬしの嫡男なり

と、時（傍線（A）の部分）、処（傍線（B）の部分）、人（傍線（C）の部分）の設定をしている。即ち、方处的世界は、安房、上総を基点とするものである事を明言しているのである。これを基点として、過去において、此の基点を確立する迄の系路を示すわけであるが、鎌倉—結城—相模—三浦半島—安房（白浜）、迄は極めて簡略に説明するにすぎない。同輯第二卷以降は、安房四郡にレンズを当て、詳細に映し出し、安房四郡—安房郡（館山城）、朝夷郡（平館城）、平郡郡（滝田城）、長狭郡（東条城）

……の群雄割拠の中へ、安房白浜に上陸した結城の落人里見義実主従三人が、どの様にして民意を獲得し、滝田城の城主となり、次第に四郡を平定し、安房一国の国主となつたかについて物語つてゆく。それ迄は、安房一国内の治乱興亡であつたが、巻四（七回）に至り上総国と、将来安房上総が里見の采領地として、基点となる事を暗示する様に、伏線的な交渉が生じてくる。契機となつたのは、本伝の主人公八犬士の母である伏姫の許婚者であり、八犬士の庇護者である——宛然父の如く、その出生を助け、八方へ飛散した八玉の行方を尋ね、もとの里見家に繋ぎとどめる役割——金梳大輔孝徳、後の、大法師の出生地——（天羽郡関村）——並に、伏姫の生母・五十子の里方——（椎津城主万里谷入道静雲の女）——としてある。第二輯第二巻第十四回において、富山において八房を狙つた銃に伏姫も傷き自害するのであるが、討つたのは金梳大輔であり、その際、「あやしむべし瘡口より一朵の白気閃き出、襟に掛させ給ひたる彼水昌の珠数をつゝみて虚空に升ると見えし珠数は忽地弗と断離れてその一百は連ねしまゝに地上へ墜と落とし空に遣れる八の珠は粲然として光明をはなち飛逸り入素れて赫奕たる光景は流るゝ星に異ならず……颯と音し来る山おろしの風のまにまに八の靈光は八方に散失せて跡は東の山の端に夕月のみぞさし昇る当是数年の後八犬士出現して遂に里見の家に集合萌芽をこゝにひらくなるべし」というのであるが、その安房国富山から八方に散失せた珠の行方を逐うべく「渠既に誓ひつゝ六十余国を遍歴して飛去たる八の珠を旧の珠数に繋ぎとめずは生涯安房にかへらじ」と断言して安房国を出てゆくのである。即ち以上（二輯巻第二十四回迄）が、大序であり、安房国

が先ず、方处的基点として確立されたわけである。

玉の行方から本舞台に入るが、第二輯第十五回以後は、武蔵国（豊島郡下菅菰、大塚、滝の川弁財天、神宮川、煉馬、新川の猫俣橋等）を点出し、こゝに第十七回で八犬士の一人、大塚信乃を出現させる。二輯二十回では同じ背景の中で、八犬士の二人目犬川莊介（額蔵）を登場させるが、彼が生国伊豆を出発して安房国へ行こうと志ながら曲折を経て果せず武蔵国に留つた系路は極めて簡略に信乃との会話中に紹介される。伊豆、鎌倉に詳筆をさけ、大部分の力を武蔵国に注いでいるのは、江戸周辺、江戸人行楽の地を舞台にして、例へば、三輯二十五回の「巢鴨を左手にみかへれどあとにはにぎぬ石神井の流に浴ふて西ヶ原田畑を過る夏の雨に追れて簑輪の笠やどり石浜村に舟まちて稍うち渡る墨田河その樹下の涼しさに霎時とてこそ柳島こゝ下総と人はいへどなほ遙なる許我の里今宵の宿りへいそぎけり」の如き表現は、近松における道行の常套的手法に倣つて、方处的親近感が観客に訴える特殊な効果を狙つたものである。かくして舞台が下総へ移行する。他方又武蔵国では、二十七回に八犬士三人目の犬山道節が出現し、出生地煉馬を、君父の池袋での討死によりて出奔、「下野、下総、武蔵の豊島を券縁しこゝにも火定の詐欺」もて金錢を集めている事を会話中に語らせ、円塚山（豊島本郷）で火定に入る。三十回では又舞台が下総許我の芳流閣という坂東太郎に臨む高楼上の捕物となり、構成として最も派手な見せ場を展開させる。四人目の八犬士犬飼見八（生国安房国——行徳——許我）が信乃と組み合つたまゝ大河の小舟に落ち、流れてついた行徳の古那屋に五人目の犬士犬田小文吾——（安房国神余の旧臣那古の一族で行

徳亡命)——と会う。生国より行徳迄の系路は例によつて会話中に簡略に済される。四十一回迄舞台は、行徳、市川で四十回に六人目の犬士、大江親兵衛が幼児として登場、八犬士を召集の任務をもつゝ大(金碗大輔)が彼等とめぐり会い乍ら又引き離される。四十二、四十三回は武蔵国、四十四——五十一回は上野国甘楽郡白雲山、白井城、荒茅山が舞台となり五犬士が艱難を相扶け、或は君父の怨をかえし、五犬相会を喜ぶのも束の間、敵の包囲にあつて再び四散する。以下再び離散した五犬と三犬士を逐うてゆく。五十二回以降、舞台は武蔵国に戻り石浜城下が背景となり、七人目の犬士犬坂毛野——生国相模国足柄郡犬坂——を登場させる。この生国を出て石浜城下に出現の系路も亦、会話中に簡略になされる。対牛楼上の血闘となり墨田川を毛野と小文吾は柴舟と荷舟に飛のり、再び二犬は別れて、五十八回は市川行徳に戻る五十九回は武蔵国を背景とする小文吾と、上野——下総——武蔵——信濃——木曾——近江——京都——(この間大和の葛城、大峯、近くは愛宕、鞍馬の深山——に大江親兵衛を索ねしかど云々)、京に三年して再び友を探して廻国する犬飼見八を扱い、見八をして上野国——遭坂——高崎川——前橋——大胡——室——深津——花輪——梅雨入——をへて下野国に到着させる迄を、例の如く簡略に系路を説明し、下野国真壁郡網亭の里に舞台を定める。六十回——六十七回は下野国庚申山の怪猫退治という一事件を構成して八犬士の最後の赤岩大角を出場させ、異色を出したが、二犬士は下野を去つて友を探して信濃——上野——武蔵——相模をへて鎌倉に到る。五十一回において四散した犬士の一人信乃が甲斐国巨摩郡富野、穴山の山脚に現れ、六十八回以降は甲斐国が舞台となり活劇が演ぜられ

る。遂に此巻で、八代郡石禾郷の指月院に、道節、信乃、大、照文、(莊介)が会し、以後、指月院を八犬士の会会所(本拠)として集合しようという計画をたてる。篠予嶺、王字の駅(武蔵国都筑郡)を点出したが異色は出なかつた。浜路姫を指月院から安房へ届け、小文吾が鎌倉——伊豆——太島——三宅島——浪速——有馬の湯——奈良——堺——北陸道——越後国新羽郡小千谷郷に至る系路を例の簡略な説明で済し、七十三回後半より越後を舞台と定め、闘牛場という珍奇なみせ場を設定する。こゝへ指月院を去つて友を求めてあるく大川莊介を会せしめ、信濃路の修羅場で犬阪毛野と三犬士再会したが、早朝、毛野は再び君父の仇を晴す為に別れ、見八と大角は他の犬士を求めて鎌倉——伊豆、駿河、遠、三、尾、勢、美濃、近江をへても巡りあわず下野真壁郡へ帰り、又友を探して下総——武蔵国千住の近く穂北で難に遭い、信乃、道節四犬会合する——八十五回——。四犬は八十六回では更に別れ、現八犬大角は甲斐国石禾の指月院へ向い八十七回では、八犬士集合の場、指月院が後住の法師入庵して、八犬士の居所が一応判明した今日、大は結城の古戦場へ向い、二犬は簗生山へ参り又別れる。八十八九回は武蔵国豊島郡の湯島天神境内となり、毛野を、九十回では武蔵豊島郡司馬浜を背景とし小文吾、道節を、更に品革と大森村の間なる鈴茂林で毛野は二犬の助太刀を得て宿願の旧仇を報ずる。

さて、九十七回に到つて、漸く、舞台が基点、安房、上総に戻る。里見の仇敵として上総夷藩郡館山城(城主幕田素藤)が登場し、百一回より里見家に仇をし、富山参詣の義実を窮地に逐いつめるが、百四回において大江親兵衛が犬士として出現しその難を救う、舞台は基点の安房国の高峯富山であり、最年少者大江親兵

衛をこゝに点出する。百七回に再び上総の館山城、五十子城、稻村城、百十五回に武蔵国に移行、両国河の見世場をつくり、第百廿一回には上総（館山城）で親兵衛の雄戦をへて、遂に下総国結城郡結城城西のゝ大庵（嘉吉の古戦場）で七犬士会合しての大法要、仮捕使の難を防ぎ中、武井駅を去る左右川の圪橋で犬江親兵衛来り援け、はじめて里見の八犬士が名乗りあう事になる―百廿七回―。馬琴は此処で「嗚呼時なる哉至れる哉八犬爰に具足して八行の玉聯串の功ゝ大の宿望虚しからぬを看官もうち微笑まるべく作者は二十余年の腹裏その機を発く小団円」と喜んでゐる。即ち此処で、富山山中から飛散した八玉を尋ねて漸くゝ大は聯串の功をつんだわけであるが、未だ此処は方処の基点に戻りついたわけではない。方処の構成は百卅一回、八犬士は迎の快船に乗り、安房の白浜―結城の落人義実が上陸した地点―に上陸し、延命寺に落着の上、滝田城、稻村城出仕において一応の小団円となる。百卅二回以降は八犬士四散時代の方処の世界と異り、安房より京都へ向ふ途次苛子海中の危難、菱山の窮難を経て、京都を背景に、水滸伝模倣の事件を展開する。里見両官領の戦役に八犬士が戦功をいたすのも水滸の構成であるが、方処的に生彩ある構成をみない。百八十回に八犬士八城に封じ八女を娶すのであるが、後六十にあまる頃八犬士は延命寺に会して政致を申出、富山に同居し、春は花鳥を秋は峯上の丹楓を楓として二十余年を経、その子の八犬士に致仕を説くと見えたが忽焉としてあらず室中馥郁たる余香の薫るのみというので終る。即ち、房総の南端、安房の富山を基点として八方に飛散した八玉を遂うゝ大が再び八犬士を富山に召集し、里見家興隆に尽力させた後、三度富山に集合さ

せ、八犬一度に雲散霧消させるのである。

以上詳に觀察して来た結果、次の事が明言出来ると思うのである。

(1) 八犬伝において馬琴は、南総の安房富山を基点とし、此処より飛散し、此処へ帰着すべき八犬士の実際の活動圏を、安房より順次、上総、下総、武蔵、上野、下野、甲斐、信濃路、相模、と拡大し、後輯では京都に及んだわけであるが、他の何れよりも、武蔵、下総を最も屢々、詳細な土地名を掲げて背景としたのは、江戸人の親近感に訴える方処的構成の意図によるものである事。

(2) 前述「例の如く簡略に系路を説明する」と屢々言つた様に、八犬士遍歴のコースを説明する際、武蔵下総、安房、上総以外の地、北陸道、中山道、信濃路、京都に堺（前輯）等、は実民事務的に扱われ、筆者はいさゝかもそれらの地域に関心をもちたぬ様である。これは一般は馬琴の土地不案内に帰因するものである。というのは房総半島についても、彼は房総志料に依存している。例えば、「富山」の叙述の如き「抑富山は云々」は、志料の「富山は彼土第一の高山にて那古洲崎土浦等の海直下に見ゆ」の文字をいさゝか変えたにすぎず、安房国長狭郡の天津、浜荻、内浦、小湊、市ヶ坂、台宿云々の地理は（九十七回―百四回）、实地調査したものではなく、志料の大まかな記述をよすがにしている如き状態であるから。しかし此の常套的な説明は方処的構成上、あまりにも頻度が多く、友を探しての空まわりに墮し不手際というより外はなく水滸に遙に及ばぬところである。

(3) 地形的变化、即ち、山あり、水あり、（其処に盜賊あり敵

ありで事件構成が出来るが、一寺院あり、山寨あり、は全く水滸の変化を倣つたもので、これは、「唐山元明の才子等が作れる稗史には自ら法則あり……主客……伏線……襪染……照応……反對……省筆……隱微」と支那小説の手法をそのまゝ受容して「譬ば……船虫蠅内が……」と八犬伝の構成を以て説明し、「及ばずながら本伝には彼法則に倣ふ事多かり、又但本伝のみならず美少年録、俠客伝、この余も都で法則あり」として水滸の手法を遵法している事を暗に誇る如き口吻を洩している事によつても想像出来る事である。馬琴は梁山泊に甲斐国石禾郷指月院をあて、後又大と共に結城城西のゝ大庵に移行させる。水辺楼上の捕物、争鬭を華やかな芳流閣、対牛楼にもつて来たのは水滸の模倣ではあるが一層印象的で成功である。

(4) 八犬士四散中の方処的世界の構成が著しく具体的であるに比べ、里見家臣となつて後のそれ——関東以遠——が著しく抽象的である事は、馬琴が眼疾に祟られて、自ら杖を曳く実地検証の不備と、地誌的資料博搜の不可能による宿命的な欠陥であると思われる。即ち、馬琴親近の江戸近郊、武蔵、下総は人口に膾炙する程、方処的構成に秀でたが、肝腎の房総においては辛じて房総志料の為に糊塗しえたけれども、杖の及ばぬ関東以遠において方処的構成の生彩を欠くに到つたのである。構成的であろうと意図し、水滸画伝、並に八犬伝卷末評において、水滸の重複趣向の類似を難じた馬琴は、自作の後記で亦、一度出場させた人物を最後まで十分活動させたと傲語するのであるが、船虫の如きは活動させすぎて不自然である事には気付かなかつた。又卷の五欄外註に「ゝ大照文等はいまだ信乃現八小文吾等にあはずして居ながら未

見の道節莊介等にあひし事亦是奇中の奇といはんか」と、とぼけて自作の人物配置の不自然を意識し是を故意に隱弊して「看官」を「愚」にしているのである。しかしながらそれにしても、此の様ないはば構成的であろうとする配慮は十八世紀に到る迄、日本の小説作家の有たなかつたものである。以上の意味において、馬琴は八犬伝において本質的に水滸伝の、即ち、支那長篇小説系の構成力を身につけた得がたい作家であると思うのである。此の意味における日本の要素と言へば、指月院出会の場における如く、伝中屢々みうけられるところの歌舞伎的場面設定、並に浄瑠璃的道行の模倣が僅にみられるにすぎないのである。即ち古典よりも同時代戯曲の影響示唆を受ける所が僅にあつたのみといふべきである。

——本学助教授——